

博士論文（要約）

一九二〇年代～一九四〇年代の日本の詩における「人間ではないもの」の表象

—動物・機械のイメージを中心に—

鳥居 万由実

本論文は一九二〇年代～一九四〇年代の日本の詩における「人間ではないもの」の表象を主題とする。この時代は詩の中に動物や機械といった「人間ではないもの」の表象が爆発的に登場した。この時期には産業機械の浸透、職業婦人の増加、都市化、植民地帝国の拡大など社会構造が大きく変動したことを考えると、「人間ではないもの」のイメージは、従来の「人間」概念が揺らいでいたことの反映だと考えられる。こうした表象は一九三〇年代までのモダニズム詩において飛躍的に増え、日本の全体主義化が進むにつれ急速に減少したことも興味深い。

そこで「動物・機械、人間」というキーワード、つまり規範的人間とその他者という切り口から詩を読み解き、人間概念がどのように変遷していくのかを追うことを研究の軸とする。詩の中で女性や下層労働者など、周縁化された者達は頻繁に「動物」として表象される。また機械は人間の仕事を奪い抑圧する側面、殺傷兵器といった負の面から描かれると同時に、人間を超えた、感情に動かされない合理性を持つ労働者の規範としても表象された。動物や機械は規範的人間とその他者が出会う場面に登場するイメージであり、「人間」概念の振幅を記録するものとなっている。このため本論文では研究対象を一人の詩人に絞るのではなく、動物・機械 という切り口から、規範的人間とその他者の関係の変遷を追うことで、より包括的に近代日本における人間概念や人間主体のあり方を探求する。

論文構成としては、大きく二部に区切った。第一部では戦間期におけるモダニズム詩に焦点を当てる。第二部では主に一九三〇年代後半から四〇年代における戦時下に書かれた詩を中心に取り上げる。

・第一部

第一章では、女性モダニズム詩人の作品において、当時の社会の性規範から逸脱する、表現しえない自我が、どのように詩的表象として昇華されていたかをみた。一九一〇年代はすでに婦人解放運動が盛んになり、それまでの性規範から逸脱するとされたモダンガールや職業婦人も闊歩していた時代だが、まだ法律上女性は禁治産者として扱われていた。当時の女性が抱える閉塞感、また当時は見出し得なかった「母」「妻」とは別のところにある新たな自我への希求が、彼女らの作品には溢れていた。

第二章では、上田敏雄の作品における人間的な感情の排除を分析した。彼は徹底して詩から人間的な感情や思考を取り除いた詩空間を構築していた。その初期作品を追うと、この背景には主体の機能不全が見出された。このことは、映画などのテクノロジーや、消費社会によるパフォーマンス空間の広がりなどが、外側から対象として眼差される客体としての自分について過剰に意識させてしまい、本来は世界の事物を対象として認識すべき主体の働きがぎこちなくなってしまうことに由来していると考えられた。上田敏雄は、単に流行の様式としてモダニズムを取り入れていたのではなく、そこに機能不全の主体の問題への解決策を見出していた。

第三章では萩原恭次郎の作品を取り上げた。農村で自然に溶け込んでいた身体感覚が、都市へ移動してから寸断され変化した様子が記録されていた。農村では、主体の感情は自然の

空間の広がりの中にやすらっていたが、都市では、資本の論理や工場機械、都市という人工空間、電車やラジオなどの近代テクノロジーによって、知覚が断片化され拡散する。だが恭次郎は、主体の崩壊感覚を利用して、テクノロジーと接合した新たな生存感覚を打ち立てようともしていた。

・ 第二部

第一章では、まず戦時下に書かれていた典型的な体制翼賛詩について、その特徴を主体という観点から検討した。翼賛詩においては、何よりも意味の透明性に注目した。その透明性は、翼賛詩の中で、天皇の臣民としての主体が、空間的にも時間的にも明確に位置付けられ、大東亜圏建設のために戦うという目的を与えられたことによると考えられる。それに伴って、翼賛詩の中で、動物や機械の現れる頻度は極端に少なくなり、出現しても、沈黙して淡々と任務を遂行する国民の心情を象徴するものとされていることが多くなった。そして日本民族が世界の模範たる理想的な人間だという典型が打ち出された。

第二章では、高村光太郎の詩に現れる動物表象の変遷を追った。動物を主題とした作品群の中には、他者との葛藤の後が刻まれていた。西洋に渡り、一人の東洋人として疎外感を味わっていた光太郎は、周囲の西洋人に比べて自分を人間ではない動物の側になぞらえた。この葛藤は、西洋との間だけではなく、芸術家である自分を理解しない俗世間との間でも行われており、動物のイメージによって光太郎は理想の自己を支えようとしていた。ただ、動物は心を読めない対象として他者性も有していた。このため、動物と光太郎の間には、同一化と他者化の双方の動きがみられ、それは光太郎が分かり得ない他者と向き合う場所ともなっていた。

第三章では、戦時下に翼賛的な詩を書いたものの、独特な機械の概念により、国家を超えるビジョンをも見出ししていた大江満雄の詩について論じた。大江満雄は、クリスチャンでプロレタリア詩から出発した詩人であり、一神教的な神の概念が、彼が労働で接していた機械という存在にも流れ込んでいた。この神性を有した機械が、彼が戦時下にした詩の中でも特異な存在感を発揮していて、人間を超越した世界を見ることを可能にさせていた。

第四章では、金子光晴の動物表象を中心に論じた。特に戦時下の抵抗詩に現れる多数の奇妙な動物たちの役割を探った。動物たちは社会権力との関係で多かれ少なかれ、主権を持たない動物のような存在になってしまう人間達の様相を浮かび上がらせる必然的な手法だった。また光晴の動物や死骸としての自画像を追うと、彼が自分をまっとうな人間ではないもの、まっとうな主体を持たないものとして表象していたことが分かる。その背景には創造神さえも不完全なものだという世界認識があった。光晴の描く世界には、理想的な規範としての主体は見当たらない。

・ 動物と機械

動物表象に関しては、高村光太郎の詩に見られたように「他者」との関わりの問題系が表れていた。また動物は、ジャック・デリダが指摘する「主権者と獣」という両極を描き出す。人間社会を超越した主権者は、他の者を客体として扱う神聖な「獣」となる。そして、他の

者から人間主体ではなく、客体として扱われる者も また人間以下の「獣」として表現される。

他者とは、常に了解不可能性を持つそれ自体の原理で動く主体であると考えれば、主権者と獣は、他者が他者性を喪失する場面に現れる。主権者は、他の者の主体を否定して、単なる道具として取り扱う。主体を否定された者は、人間という属性を失い動物として表現される。この点を逆手に取り、左川ちかは規範的な女性（人間）からは逸脱してしまう自我、完全な人間主体とはみなされない自我を、動物に託して可視化していた。機械表象については、テクノロジーの発展に伴う人間存在の変化が刻み付けられていた。まず、工場機械との関わり合いによる存在感覚の変容がある。負の側面としては、萩原恭次郎が描いたロボットのように、道具として命令通りに動く存在が現れた。これは、主体である筈のものが客体として扱われるという点では、動物表象とも共通している点だ。しかし、機械においては人間の主体が存続しつつも、それが別様に変化させられていて、生体を持つリズムではなく、生産ラインの要請する手順に合わせて、身体の動きがコントロールされていた。そのために労働者は自分の身体と機械の境界が定かではなくなる経験をする。

新たな身体感覚をもたらしたのは、工場機械だけではなかった。急速に広がった映画や交通機関、通信メディアなどのテクノロジーも、それまでになかった身体と主体の感覚をもたらした。とりわけ萩原恭次郎の詩には、写真や映画を思わせる技法で、統一された主体から自由になった、感覚器官の拡張がみられた。また世界で起きている出来事を同時に並列するメディアによって、「今ここ」の時間も相対化された。テクノロジーによる新たな感覚は、恭次郎の詩の中で苦痛と悦びの両方と結び付き、新しい人間の存在様態を想像させるものになっている。機械表象には、テクノロジーが生み出した新たな崇高性も刻まれている。本論では大江満雄が機械に対して人間の世界を超越した神的な存在を垣間見ていることを確認した。これは彼のキリスト教信仰と結び付いたものであった。

また、機械は人間の感情が及ばないシステムの寓意ともなっていた。金子光晴が描き出してみせた「鮫」には、機械の特性も付与されており、人間的な内面が想定されないため感情移入が難しいものとなっている。法権力や社会体制などシステム化された権力が人間の感情とは別個に駆動している様子を想起させるものだった。上田敏雄が、詩作のモデルに「メカニズム」という機械に関わる言葉を持ち出したのもこのためだろう。詩から人間的な主体の感情や思考を抜き去るために、自動機械のような原理が理想とされた。機械は人間的主体を消去するために呼び出されていた。本論で扱った時代に現れた動物や機械は、現代へと続く、日本社会の変動が始まった時代に生きていた人々の心象風景をよく記録するものとなっていた。詩人一人一人が、社会変動による主体の危機と格闘を繰り広げ、作品はその格闘のドキュメントでもあり、本論文はその様子も記録した。